

私のリビングウイル

第9回

松尾英男

医療法人社団松健会
えびす英クリニック院長

治療の手立てがなくなったりときに、延命治療を控えて終末期に望む医療行為について、事前に書面を残しておく。自らが望む最期を迎えるための意思表示であるリビングウイルは、非常に重要だ。しかし、日本での普及率はまだまだ低い。本コーナーでは、医療関係者に自らのリビングウイルを語ってもらう。第9回は、医療法人社団松健会えびす英クリニックの松尾英男院長に話を聞いた。

誰もが「死」について考え 生を謳歌する社会をつくりたい

元気なうちから 死を学ぶことが重要

在宅医療に携わる医師なら、それぞれ自分なりの死生観を持っているだろう。ただ、患者さんやご家族は違う。そのため私は、最期を支えるうえで、一人ひとりの意思をサポートすることを念頭に置いている。

患者さん自身の意思と、ご家族の望む方向性にずれがあることもある。そもそも、病態や疾患がどのように進むのかわからなければ、意思決定はできない。

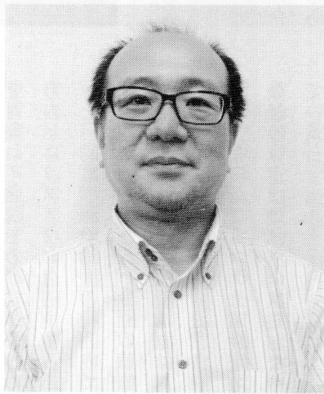
そこで、私たち医療者も話し合いのなかに入っていく、疾患など必要な情報を説明し、お互いに話し合いをするように働きかけながら、意見を統一していくように促している。

今年3月に改訂・公表された『人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン』にも盛り込まれた、アドバンス・ケア・プランニング（ACP）は、まさにそれだ。
ただ、死を目前に控えた段階で短期間で死を受け入れられる人はほとんどいない。そのため、多く

の人が元気なうちから自分の死について考える機会をつくる必要があると考えている。

たとえば、地域住民がお互いに意見が言い合える勉強会や、小学生・高校生に向けた「いのちの授業」も有効な試みだろう。

また、訪問診療で家族や周りの人が患者さんの介護や在宅看取りを経験することも、死について学ぶきっかけになると思っている。同じ家で過ごし、介護や病態の変化を肌で感じることができ



まつお・ひでお ● 1994年、杏林大学医学部卒業、杏林大学病院第3内科入局。複数の病院、診療所での勤務を経て、2001年、えびす英クリニック開院、院長に就任。17年、医療法人社団松健会理事長に就任。現在に至る

表 松尾英男のリビングウイル

松尾英男のリビングウイル	
①	最期はできれば自宅で過ごしたいが、家族の負担なども踏まえて判断する
②	経口摂取ができなくなった場合、経管栄養などは望まない。ただ、食欲があるが機能面から摂取できない場合は、リハビリなどに取り組みたい
③	意識がなくなり、回復不能な場合は、延命措置は望まない
④	回復が見込めない場合、専門家による疼痛の緩和ケアを十分行ってもらいたい
⑤	70歳くらいになったら、家族や友人と一緒に生前葬を行いたい

るからだ。
こうした看取りの経験を、次に看取る人たちに伝える場所も必要である。看取った人とこれから看取る人の橋渡しができないかと思
い、私は昨年、当院の患者さんと家族、そして遺族の方で構成され

る家族会「ゼロの会」を立ち上げた。小規模な会なので、皆で食事を囲みながら話をしている。ここでは、家族や大切な人の看取りを経験した本人に話してもらっている。
これは看取りに限らず、たとえば、病院で胃ろうを提案された患

**死を知ること
生き方を見つめ直すこと**

私が自分のリビングウイルを考
えるなら、表のとおりだ。

①は、私自身も日頃の診療で介護施設や老人ホームにも行っているが、やはり、できれば自宅がいい。家族に負担がかかるが、現在の介護保険のサービスを組み合わせれば、ある程度やっていけるだろう。しかし、やはりそのときになってみなければ、判断は難しい。

②と③についても、過剰な延命措置は望まない。ただ、経管栄養については、意識はクリアだが嚥下機能にだけ問題があるケースもあるため、一概には過剰な延命治療になるとは言えない。

④については、これまでも痛みに苦しむ患者さんを多く診てきたので、自分も耐え難い場合は医療用麻薬などをどんどん使って、意識レベルを落としてもらってもかまわないと考えている。

者さんと、胃ろうをしている患者さんを引き合わせたこともある。今後、徐々に地域の訪問看護師やケアマネジャーなどにも声をかけて、広げていければと思っている。

⑤については、死んだあとにたくさんの人に来てもらっても話すことができないため、70歳くらいになったら、友人を呼んで飲み会のような形でもいいので、生前葬を行うことが理想だ。生きているうちに話をして、「君に会ったおかげで人生楽しくなったよ、ありがとう」という言葉を交わしたい。

私の知っている死生学研究会の先生は、ご夫婦で互いに連れ添ってくれたことへの感謝を伝えながら、出前の寿司と缶ビールで乾杯したという。生前葬は必ずしも盛大に執り行う必要はなく、どんな形で誰と気持ちを分かち合うかは、それぞれの自由だろう。

*

私も今年で51歳になり、あと15年くらいすれば、徐々に今の仕事を続けることは難しくなっていくだろう。そのため、今後、より日本に死生観について考える土壌が広がればいいと考えている。

現代の日本人は働きすぎだし、心よりも物質的な豊かさに偏っていると感じる。死生観を学ぶことは、終わりを考えることで今をどう生きるかという、「生き方の改革」にもつながるのではないか。